

日本歌唱芸術協会

本部：沖縄



会報

第七号

- ドイツ留学～子育てと学業-----仲村渠 悠子 pp. 1-4
- わたしの発声法ノートⅡ-----糸数 剛 pp. 5-6
- 「ガルシーア＝ロルカ」
— 命を賭けて権力と闘い続けた芸術家 — ① -----服部 洋一 pp. 7-9
- 声の老化-アンチエイジングについて-----喜友名 朝則 pp. 9-10
- 声楽に導いた歌うピアノ-----豊田 喜代美 pp. 11-15

2023年9月

©日本歌唱芸術協会（本部：沖縄）



■ ドイツ留学 ～子育てと学業～

仲村渠 悠子 (ピアニスト)

会報第五号で書かせていただいた、「ドイツ留学～ドイツでの生活、恩師との思い出」の続きになります。

2005年1月、予定日より6週間早く生まれた長女は1.8キログラムしかなく、保育器の中でひと月過ごしました。毎日、冷凍させた母乳を病院に届けるのですが、雪景色の中を歩く道のりが、いつも通っている通学路とは違う別の道であることに、新たな人生の扉が開かれたような深い感動を覚えていました。

その年4月に、デトモルト音大のチャリティコンサートで、ピアノ協奏曲を弾かせて頂けることになっていたのですが、長女が保育器にいる間、練習を再開し、はじめてのオーケストラとの共演に胸高ならせていました。家では指揮をする主人と練習を重ね、韓国からは主人のお母様が手伝いにきてくれました。ライブツィヒに住んでいた主人の弟（歌手）も駆けつけて、オモニ（お義母様）の作る料理を囲み、ドイツでの暗い冬がこんなに賑やかになったこともなかったでしょう。

韓国では、産後の女性は一か月わかめスープを毎日飲み、家事の一切をせずに体を休ませるといふ風習があるとのこと。ありがたいことに、私もオモニの甲斐甲斐しいお世話のおかげで、産後（3か月程）、家事を手伝っていただき、学校を休まず子育てを平行して続けることができました。2006年に長男が生まれた時も同じように来て頂き、嵐のように忙しい日々でしたが、本当に助かりました。

学校の授業は、ベビーカーにのせた娘と一緒に受講させて頂けるものもありましたが、ほとんどの場合、教室前でベビーシッターをお願いしている友人にバトンタッチして、授業が終わるまで校内を散歩してもらったりしていました。一番困ったのは、練習時間の確保です。本番前はどうしても大音量での練習になってし

まうので、寝かしつけて練習をはじめようとすると、ピアノの音で起きてしまい、いつまでたっても練習をはじめることができません。夜22時～24時は絶対練習すると決めて、寝かしつけたあと学校に向かうのですが（学校は24時まで練習可能）、真冬の寒い日は本当に億劫になってしまいます。

本番前の緊張と焦りを感じ取るのか、練習に熱が入れば入るほど、娘の泣き声も大きくなります。ピアノの大音量と娘の泣き声に耐えられる隣人というのは、なかなか見つからないものでデトモルトでは4回も引っ越しをしました。

最後に落ち着いた家は、取り壊し直前の3階建ての古い家でした。1階がガラクタを集めて販売している不思議なお店で、2階が倉庫みたいになっていたのですが、美術学校の置き場に困った物や、どこから来たのかわからないお風呂場のバスタブ、2メートル近くある巨大なサンタクロースの人形などが置かれていました。

3階が私たちの住居になるわけですが、空き家の期間が長かったため、床が腐敗していて、修繕にひと月程かかりました。主人の指導していた合唱団の男性陣が、床を修理してくださり、壁紙を張り、見違えるようになったものの、吹雪の日は屋根裏の隙間に新聞紙を詰め込まなくては雪が入り込んでしまうほど、どこもかしこも穴だらけの家でした。そんな状態でもこの家に住みたかったのは、何と言っても24時間音出しが可能だということです。目の前は小学校で、夜になれば人はいなくなりますし、立ち退き命令の出ている通りらしく、住んでいるのは、何軒か先のヒッピーのようなご家族のみでした。ヒッピーのようなご家族と書いたのは、その家の人たちが外でも裸足で歩いていて、夜になると焚火をしているからです。はじめは怖いなと思いましたが、道で会うと少し微笑んで会釈してくれますし、苦情がくることはありませんでした。あちらの家から聞こえてくる音楽も、不思議な民族音楽のようなもので、お互い大音量で音を出していました。思いっきり練習

できる環境というのは、本当にありがたく 2015 年にドイツを去るまでこの家に滞在することになります。

ここで、私がデトモルトでお世話になった 3 人の先生について書いてみようと思います。

フランス人のバブゼ先生については、会報第 5 号でも触れましたが、当時演奏家として油ののっている 40 代半ばの先生は、曲の仕上げ方、練習の仕方、合理的な体の使い方などを実際のすばらしい演奏で示してくださいました。はじめに学んだ楽器が打楽器だということで、体の中に常に正確なビートがあり、ハイドン、ドビュッシー、バルトークの作品を得意としていて、現代のピアニストに求められる、膨大なレパートリーをものすごいスピードで習得していく術をみせてくれました。

konzertexamen (大学院) の合格発表の日、バブゼ先生からアナトール・ウゴルスキ先生のところで 1 年学ぶことを勧めていただきました。バブゼ先生とウゴルスキ先生はことあるごとに意見の衝突があるらしく、二人の仲が和気あいあいとしたものでないことは有名でしたが「ウゴルスキ先生はあと 1 年で定年になられる。彼とはそんなに良い仲ではないのだけど、芸術家としては一流で尊敬しているから、大変勉強になると思うよ。彼のもとで一年学べるよう頼んでみようか。」と提案して下さりました。

ウゴルスキ先生はロシア人で、ペレストロイカの時、ユダヤ人迫害が家族に及んだことからドイツに亡命し、ドイツ・グラモフォンと専属録音契約を結んだことから日本でも有名で、憧れのピアニストの一人でした。恐れ多くて近づけないとびくびくしていた私ですが、このありがたいチャンスを生かさなければと、長男の出産間近でしたが、週 2 回のレッスンに足しげく通いはじめました。

ウゴルスキ先生は本当に自由な方で、レッスンは先生の自宅がほとんどでした。レッスンに行くときケーキでも食べないか、と台所に通されケーキだけ食べて帰ることもありましたし、お

かしなことにピアノの椅子は調整してはいけないといわれました。自分がピアノを弾くときに椅子の高さをもとに戻すのが大変だということです。ある時はベートーヴェンの後期のソナタを持っていったのに「今日は、ベートーヴェンの気分じゃないなあ。スクリャービンはどうだい？」というので、「スクリャービンは練習していません。」というので、「じゃあ、一緒に譜読みをしよう。」と 3, 4 段一緒に譜読みをして、またコーヒーを飲んで帰されたりしました。

レッスンが終わり、先生のお宅を出た後、毎回今日は何を学んだのだろうかと首をかしげるばかりです。1 年しか期間がない上、長男の出産も控えていたので、通える間は沢山レッスンしていただこうと、週 2 回のレッスンをありがたく思っていました。1 曲もまともにレッスンしていただけていない状態でした。

ある日、「今日は学校でレッスンをするよ」と連絡がはいつたので行ってみるとレッスン室に門下生と、聴講生（受験前には特に沢山の聴講生がいて、隙間時間に演奏をきいてもらうチャンスを待っている。）がぎっしり待機していました。

今日は、まな板の鯉だなど諦めて弾きだすと、すぐにとめられて「ここはね、」といいながら先生がなめらかに弾きはじめました。先生の演奏は結局曲の最後まで続き、その時の演奏の美しさ、すばらしさは形容できないほどでした。私を含め、数名の生徒の目から涙がこぼれ頬を伝っていました。この瞬間を共に出来たことの喜びと、そこに居合わせた奇跡のような時間に感動で胸がいっぱいになりました。

これが世界の超一流と言われる人の演奏なんだなど、しみじみ思ったものです。その後 YouTube などでも、先生の演奏を見かけることがあります。その時感じた感動を思い起こさせる、すばらしい音源がありますのでぜひ聴いていただければと思います。

先生が弾き続ける時は、調子の良い時が多いのですが、完全に別の世界に行ってしまうとい

る、そんな印象を受けます。弾き終えたあとは、「今日はここまで。」と言って、レッスンは終わりです。他に言うこと、教えることはないというのをその場にいた人全員が同じように感じたことでしょう。ウゴルスキ先生のレッスンは、先生のその音楽を聴けば、言葉で表せるものではないことがわかってしまうようなレッスンでした。

ドイツ語を流暢に話す先生ですが、どうやって勉強したかをたずねると、「辞書をはじめから(アルファベットのAから)最後まで読んだまでだよ」とおっしゃります。これは先生が曲を習得する時のヒントのようで面白い情報でした。

楽譜をはじめから最後まで自分の目で読むということ。どんな演奏があるか、どんな方法で学ぶかを外に探すのではなく、自分の目で読んで、演奏して靈魂を込めていくという作業を黙々となさっているのではないかと思います。最近では、便利な YouTube もありますし、沢山の資料や様々な音楽家の演奏を参考にしたり、情報を得ることは容易ですが、先生が自筆譜を好んで集めてらっしゃることからも、原本となるものの情報から読み解いていく作業を、とても楽しんでいらっしゃるようでした。

「ウゴルスキ先生から学んだことは」、とよく聞かれるのですが、レッスンでは本当にごく当たり前のこと、「楽譜に書いてあることを忠実に」などともおっしゃいましたが、それ以上にその人の個性をととても大切にしているように感じました。

Konzertexamen の修了リサイタル(その時はウゴルスキ先生は定年になられ、バブゼ先生に戻っていました。)を聴きにきて下さったので、お電話でその感想を伺ったのですが、「あなたが感想を聞きたいというから答えるけど、僕は第二部は帰ってしまって聞いてないんだよ。噂では二部のショパンはよかったと聞いているよ。でもね、何故、ベートーヴェンのワルトシュタインを選曲したんだい?あなたの持つ

瞑想的な部分が活かされる曲にすべきだったんじゃないかな。」とおっしゃいました。

私はその言葉から、今後の音楽活動の核となる大変大事なことを教わったと思いました。リサイタルというものには、ピアニストとして必要とされる技術的要素を存分に含ませるべきだと思い込んでいたし、演奏を仕事としていくには苦手とする部分を克服していかなければならないと強く思い込んでいたからです。

しかし、先生のその言葉から「たとえそれが、試験であれ何であれ、自分の個性を最大限に活かすプログラムであるべきで、まずは自分の個性、長所がどこであるかを知らなければならない。その先に人の心を動かす演奏というのがある。」というようなことがおっしゃりたかったのではないかと感じたのです。

今までは技術の向上の為、レパートリー拡大のため、演奏家として最低限必要なものの為になんとか追いつかなければと勉強してきたものが、これからは自分が演奏する意義、多くのピアニストの中から自分が演奏して良い理由を探し、それを示していけるようにならなければならないと思うようになりました。自分の持ち合わせでない能力に対して、これからは頑張らなくてもいいんだと思うと、とても楽に自由になりました。

自分の生まれ持った性質や、得意なことに目を向け、持ち合わせのものだけで勝負する。それは自分がどこで生まれ、どんなルーツを持った人間なのかにもつながることで、日本の中でも沖縄出身という、既にあるスペシャルなものに気付くきっかけともなりました。

さて、3人目の先生、アンドラーシュ・シフ先生との出会いについても触れたかったのですが、長文になってしまったので次号に持ち越したいと思います。

次号では、長女・長男を連れて家族で挑んだ、クレタ島でのザイラーピアノ国際コンクールのお話も書けたらと思いますので、引き続き読んでいただければ幸いです。

写真：筆者の夫、指揮者 Jang-Hoon Cho との最初の共演時の新聞記事

表題：2つの偉大な才能（Yuko Nakandakari, Jang-Hoon Cho）

ASTA - 素晴らしい音楽大学のチャリティコンサート

Zwei große Talente

ASTA-Konzert der Musikhochschule begeisterte

■ Detmold (ans). Viel Geld wird am Samstagabend nicht zusammengekommen sein, denn das Benefizkonzert des Allgemeinen Studentenausschusses (ASTA) der Hochschule für Musik war trotz der zahlreichen Zuhörer vor allem eine hausinterne Veranstaltung, und für die Studierenden war der Eintritt frei. Dennoch war das Konzert ein voller Erfolg – musikalisch.

Die musikalischen Meister von morgen kommen aus Japan und Korea. Die angehende Pianistin Yuko Nakandakari bewies



Yuko Nakandakari

einen ebenso energischen wie virtuosens Zugriff auf das erste Klavierkonzert von Franz Liszt. Dabei sorgte der Koreaner Jang-Hoon Cho mit großer Übersicht dafür, dass das Studentenorchester der Solisten ein mitfühlender Partner wurde.

Liszts erstes Klavierkonzert hat es in sich. Dem Tastenakrobaten, der sich dieses Konzert für die eigenen Finger schrieb,

gelingt hier eine virtuose romantische Komposition. Er fordert von dem Solisten nicht nur in spieltechnischer und musikalisch-gestalterischer Hinsicht Außerordentliches (höchst brillante Oktavketten, Tremoli, hämmernde Doppelgriffe). Das jedoch hatte die junge Pianistin mit begeisternder Gestaltungssicherheit im Griff. Liszt gelingt auch eine formale Entwicklung, die vieles offen lässt und nach kaum 20 Minuten fast überraschend und doch einsichtig ihr Ende findet.

Liszt, romantisch

Pianistin und Dirigent gebührt großes Lob dafür, diese wilde Reise durch die überraschenden Formwechsel (ein folgenloses Seitenthema, der zweite Satz dort, wo eigentlich die Durchführung beginnt, dann aber gleich ein Menuetto, und, und, und ...), die durch das repräsentative Finale dieses extrovertierten Konzerts dann ihre gültige Form finden, zu einem Hörerlebnis gemacht zu haben. Eine wilde Reise, wenn auch ganz anderer Art, hatte das Kon-

zert schon eröffnet. Kompositionsprofessor Martin Christoph Redel stand selbst hinter Glockenspiel, Marimbaphon, Gong, Bongos und Tamtams, um seinen „Traumtanz“ für Schlagwerk und Streicher auszuführen.



Jang-Hoon Cho

Die Komposition entfaltet in einer geschickt aufeinander abgestimmten Szenenfolge die changierende Begegnung aus tonalen romantischen Reminiszenzen (Celli, Bratschen) und modernen Motiven (Glockenspiel, Marimbaphon). Das gekonnte Wechselspiel von Spannung und Entspannung, von geheimnisumwitterter Statik und expressiver Dramatik würde gut 20 Jahre nach seiner Entstehung einem modernen Märchenfilm prächtig zu Gesicht stehen.

So jedenfalls der Eindruck aus dem vitalen Spiel eines bestens geführten Orchesters, das sein Publikum auch nach der Pause mit einer gültigen Interpretation von Beethovens erster Sinfonie noch einen weiteren musikalischen Leckerbissen bot.

糸数 剛（歌手・教育家）

前号（日本歌唱芸術協会 会報 第六号）でもおことわりしたが、ここで述べる発声法はあくまでも現在のわたしの到達点であり、今後修正されることは大いにあるということ。

さっそく、前号で述べたことを改めたいことが出てきた。

前号では、「ネーミング術語」のタイトル付けで、《子音前置》《鼻腔ドーム》《必要最小限呼吸》《グラデーション母音唱》《二師にまみえず》の5点について述べた。

今回は、前号で述べた《鼻腔ドーム》について考え方が変わった。訂正したい。より有効な発声法として《声帯弛緩発声》を提案したい。

これは、**You tube**の「車田和寿の歌の翼に」に大いに触発されて発想したことである。車田氏は発声法に限らず音楽全般について豊富な蘊蓄を述べておられる。その音楽についての蘊蓄と解説力は卓越している。現代はこのように貴重な講義をネットで誰でも無料で傾聴できることは大変ありがたい。

さて、《声帯弛緩発声》とはどのようなものか。文字通り声帯を緩めて発声することである。声帯に力を入れない。絶えず声帯に力を入れず、緩めるように意識して歌うことである。これが基本中の基本である。

「のど仏を下げて歌うとよい」ということを聞くことがあるが、この表現はふさわしくない。意識的に力でのど仏を下げようとする、舌根あたりに余計な力が入って声が固まってしまう。そうではなく、首回りをリラックスして声帯を緩めるようにすると、結果的にのど仏が下がるのである。

その習得の仕方。これは車田氏の **You tube** で教わったことである。顔の角度はやや上向きに、口をだらんと開けて、のどを最低限の振動で震わす。決して力を入れない。そうすると自然にのど仏が下がる。振動の原動力は下から送られてくる息の圧力だけ。これも最低限の圧力

でよい。その時の音は、文字で表すのは難しいが、細かく力で「アアアア・・・」と鋭く振動させるのではない。そうではなく、文字で表すと「あー—————」とでも書くとわかってもらえるだろうか、とても鈍い、やわらかい、それこそ最低限の声帯振動である。これを発声練習でおこなうことによって、のどに力を入れない、すなわち《声帯弛緩発声》を習得することになる。

この《声帯弛緩発声》を絶えずベクトルとして意識した上で、ポイントはマスクラだったり、頭声だったり、あるいは低声だと胸に当たったりするとよいのでは。つまり、どこにポイントを置くにしても、声帯には力を入れず（最低限の力が入るかもしれないが）なるべく緩めることを意識しながら歌うことである。

わたしは、その《声帯弛緩発声》と、前号の《必要最小限呼吸》で述べた「息の続く限界までロングトーンをする。すると、最後には自然に腹もふり絞るし、尻の穴も締まる。」を組み合わせ、**「あー—————」**で、息の続く限りロングトーンをする。一定の圧をかけて揺れないほうがよい。すると息を出し切った後、自然にお腹がふくれるのがわかる。これが腹式呼吸の原点だと思う。

たとえ話をしたい。吹奏楽の神様と呼ばれた故 屋比久勲先生（注）。屋比久先生の指揮する吹奏楽の音はすばらしい。冒頭の音からなんとも柔らかい包み込むような音を出させる。聴くほうはなにか全身の力が抜けるような感覚に吸い込まれる。決してガチャガチャする音ではなく、その反対でじつにやわらかで落ち着いた音を出させる。いわゆる「屋比久サウンド」と呼ばれている音色である。

屋比久先生は元中学校の教師で、石田中学校時代わたしは同僚だった。放課後の吹奏楽部の練習、ほとんど個人練習。で、なにをしているかというと、ロングトーンばかりしている。放課後職員室にいと、中庭ではバリトンサクソが大きな音で「バリバリバリバリーー

一」とロングトーンを何回も繰り返している。うるさい、ロングトーンばかりでなくて、もっと気のきいたメロディでも吹いてくれないかと思ったものである。

しかし、今考えると、あのロングトーンが「屋比久サウンド」の原点だったのだ。後に刊行された屋比久先生に関する本を読むとやはり「屋比久サウンド」の原点はロングトーンだと書かれている。

そこで、わたしは《声帯弛緩発声》とロングトーンを組み合わせて《声帯弛緩ロングトーン練習》をおこなっている。普通の発声練習、「ドレミレド」、「ドミソミド」など、やらない。歌う前には静かに《声帯弛緩ロングトーン練習》を息長く実行するようにしている。

車田氏の YouTube からは多くの示唆を受けてとても感謝している。ありがたい YouTube である。

だが、一つだけ、現段階のわたしからはどうしても譲れないことがある。

それは、わたしが前号で述べた《子音前置》についてである。どうも車田氏はこのやり方には否定的なようだ。子音がレガート唱を妨げるという考えのようだ。

わたしは、言葉を明瞭に届けるためには《子音前置》は必須だと思っている。特に日本語の歌には必須だと思う。決して子音をことさら強く発音せよではない。子音をそっと上品に前に出すだけのことである。

以上、前号から変化したわたしの発声ノートを述べた。これからも、きっと変化することだろう。会員の皆様のたたき台になってくれると嬉しい。

(注) 屋比久 勲 (やびく・いさお) 略歴

1938年生まれ、2019年逝去。沖縄県宜野座村出身の教員。中学時代に趣味でトランペットを始める。琉球大学教育学部卒業後に教師の道へ。沖縄県垣花小・中学校赴任時に吹奏楽部を創設。その後、真和志、石田、小禄、首里の各中学校を全国大会出場に導き、真和志中学校では沖縄県初の全国大会金賞に輝く。90年に福岡工業大学附属城東高等学校へ着任すると、同校で全国大会金賞を受賞。以来、鹿児島情報高等学校、九州情報大学の教壇に立つ。32回の全国大会出場、14回の金賞受賞という輝かしい実績を誇り、卓越した指導力で“吹奏楽の神様”と称されて沖縄県吹奏楽界の発展に貢献。2019年2月13日に肺炎のため福岡県筑紫野市の病院で死去。80歳没。

以上、2019/02/19 (CD ジャーナル)

1979年第1回琉球新報活動賞

2015年第13回宮良長包音楽賞受賞。

[著書]

『普通の子どもたちをできる子にする怒らない教え方』角川書店

・内容紹介

6つの学校で全国大会30回出場、全国金賞14回獲得の「吹奏楽の神様」が47年間にわたって伝えてきたこと。屋比久流、怒らない教え方。

目次 1 生徒の力を伸ばす怒らない教え方 (先生の情熱が音を作る/ 楽器は良いもので揃える/ 先生が勉強しないと子どもは伸びない ほか) 2 一流にするために子どもたちに伝えてきたこと (嫌いなものを好きになったら好きなものはもっと好きになる/ 勉強ができる子は吹奏楽もうまくなりやすい/ 叱られて100点より、叱られない60点がよい ほか) 3 みんなの心を一つにするチームの育て方 (60点の子でも100点の子に勝てる/ 金賞を獲得ことがコンクールに出る目的ではない/ 屋比久流・練習への取り組み方 ほか) 以上、「BOOK」データベースより

■ ガルシーア＝ロルカ

-命を賭けて権力と闘い続けた芸術家- ①

服部 洋一 (声楽家, 博士/音楽)

はじめに

本年8月19日、フェデリーコ・ガルシーア＝ロルカの命日に寄せて執筆を開始することとする。

例年にない猛暑が日本を、否、世界を襲ったこの夏。この壊れゆくかのような地球―益々地球温暖化が進み、来年の夏は更にもっと過酷な夏がやって来るのだろうか?! この酷暑のさなか、今年もまた8月19日が巡ってきた。

全世界のスペイン音楽と文化に携わる者にとっては忘れられない日、忘れてはいけない日―そう、スペインが生んだ詩人・劇作家であり、音楽家(ピアニスト・作曲家)にして、また味のある線描画家という点では美術家でもあった、類い稀なるマルチ芸術家、フェデリーコ・ガルシーア＝ロルカの命日である。

メラメラと全てを焼き尽くすかような夏の太陽を睨みつけながら、あのときも、きっとこんな息苦しい夏の日だったのだろうなど、筆者はこの余りに多才な一人の芸術家に思いを馳せた。

自由主義者であり、民族解放主義者でもあったロルカ―本名フェデリーコ・デル・サグラード・コラソン・デ・ヘスス・ガルシーア・ロルカ/Federico del Sagrado Corazón de Jesús García Lorca (1898年6月5日-1936年8月19日)は、フランコ率いるファシストたちから成るファランへ党員たちの手により、無理矢理捕らえられ、思想犯として投獄された。彼は、この日の早朝、グラナダ近郊の丘の上へ、牢屋から引きずり出され、暗殺という、不当なリンチにも等しいやり方で、法廷での何の裁きも受けさせてもらえず、冷酷にファランへ党員の手が放つ銃弾に倒れ、息絶えたのだった。

その計り知れぬ若い才能に溢れた一芸術家の尊い命は、夏の暑い日に、この地上から永遠

に葬り去られてしまったのであった。まるで屠殺場における牛や馬のように、無残にも……。

ロルカを思うとき、筆者に常に思い出されるのは、国と時代は違えども、同じように邪な権力と「国家治安保持のため」という権力者が決まって使う常套句、都合のいい嘘と詭弁、デマと暴力の犠牲者となり、同じく夏のパリで、しかも32才の若さで断頭台の花と散った、かのフランス革命時の詩人、アンドレア・シェニエ―本名:アンドレー・マリー・シェニエー/André Marie Chénier (1762年10月30日 - 1794年7月25日)である。

また更に、自由主義者にして無神論者、革命精神溢れる画家のマリオ・カヴァラドッシ(活躍期1800年前後)のことである。皆様よくご存じのように、彼らはかたやU.ジョルダナーノのオペラ『アンドレア・シェニエ』の主人公であり、G.プッチーニのオペラ『トスカ』における主人公・歌姫トスカの恋人である。

自由を愛し、民衆と共に歩む芸術家は、常に、いかなる世の中にあっても、権力者にとっては、いとも煩わしい存在であり、多数の民衆から愛されるがゆえに彼らの思想は権力者たちからは恐れられ、危険視され、常に迫害の対象とされてきた。これら理不尽極まりない権力と、死を賭してまで闘い通した、正義と勇気の芸術家たちについては、語り出せばキリがない。

その中でも今回は、ロルカについて語りたいと、この暑すぎる夏が筆者を駆り立てたのだった。さて、一応このロルカという芸術家について触れておきたい。

彼の生涯について、更に詳しくお知りになりたい方々には、濱田滋郎著「スペイン音楽の楽しみ」(音楽之友社)2013年改訂第1刷や、ロルカ生誕百年記念実行委員会(代表者:小川英晴)編の「ロルカとフラメンコ」(彩流社1989)をお薦めする。

上述のように、フェデリーコ・ガルシーア＝ロルカの職業を一言でなんと呼ぶかは非常に難しい。彼は、文学史の上では「劇作家・詩人」

であり、親しい芸術家仲間の集まりでは、学生の時から既に、よく自作の詩を魅惑的な調子で「朗読し、人々の心を奪った」（濱田, 2013）と伝えられている。美術史の上では、「ファンタスティックな線描画やデッサンで展覧会を開きもした造形美術家」（同前）でもあり、のちに触れるカンテ・ホンドのコンクール創設・企画・運営にも尽力したことに着目すれば、彼はまた創造的芸術文化推進者でもあった。

その一方、今回取り上げることもできるような作曲家兼編曲家でもあったわけで、敢えて名付けるとしたらマルチ・アーティストといえよう。濱田滋郎も言うように、まるでルネサンス期に生まれるはずが、時代を間違えて19世紀末のスペインにタイム・スリップして生まれ落ち、20世紀初頭を嵐のように駆け抜けたような人物であったといえることができるであろう。

ここで彼の詩を一遍ご紹介しよう。邦語訳は、詩人・フランス文学者、横浜国大名誉教授である小海永二（こかいえいじ）によるもの（「ギター」（「ロルカとフラメンコ」のp9）

五本の剣というのは、ギターを弾く右手の五本の指とも受けとれるが、のちにスペイン市民戦争中、ロルカの命を奪ったファランヘ党の旗のエンブレムが五本の鉄の矢をくびきで束ねているのと悲しく符合していると筆者には感じられてならない。彼のポエムには、「死」や「死神」といった、死へのイメージが色濃く、しかも頻繁に現れ（例えば、《スペイン古謡集》の中にも、果敢に闘牛に挑みあえなく負傷して死んでしまう村の青年の姿が描かれるくモンレオンの若者たち>があるが）、彼は、早くから自身の夭折を、しかも何ものかによって生命を奪われるに違いないといった、不本意な死を遂げる運命の星の下に生まれたことを、どこか予感していたのかもしれない。

彼は1898年6月5日にグラナダ近郊のフェンテ・デ・バケーロス（「牛飼いたちの泉」の意）に生まれ、1936年8月18日に、これもグラナダ近郊のフェンテ・グランデ（「大きな泉」の意）の近くで、スペインのファシスト党とも言えるファランヘ党員の兵士の手で銃殺され、わずか38歳の若さでこの世を去ったのだった。

これに先立つ、ほぼ1か月前に、フランコ將軍派がクーデターを起こし、スペイン内戦が勃発している。ロルカの死は、グラナダにおいて、ファシズムに抗戦するための市民による反乱が展開されている、その最中の出来事でもあった。民衆をこよなく愛し、人の命を脅かす不正に対して断固非難の声を上げる正義感に燃えるロルカは、社会がきわめて不穏な状況にあると知りつつも、敢えてグラナダから逃げることもせず、底に留まったのだった。

話が脇道にそれるが、劇作家ロルカの人生そのものが、このようにまた非常に劇的なものではあったのだが、彼の死に至る顛末を描いた作品もやはり存在する。

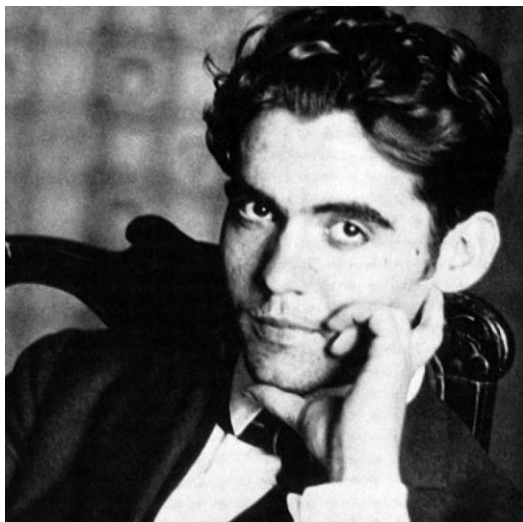
<p>〈ギター〉 ギターの すすり泣きが始まる 夜明けの 盃が割れる。 ギターの すすり泣きが始まる。 それを黙らせようとしても 無駄。 それを黙らせることは 不可能だ。 ギターは泣く 単調に、 水が泣くように、 降りゆく雪の上で 風が泣くように。 それを黙らせることは。 不可能だ</p>	<p>ギターは泣く はるかなるものを求めて 白い椿を探し求める 熱い南の国の砂。 ギターは泣く 標的(ま と)のない矢、 朝のない日暮れ、 そして 枝の上の 最初の死んだ鳥。 おお ギターよ！ 五本の剣で 重い傷を負わされた 心臓よ。</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

映画の分野では、マルコス・スリナガ監督作品、アンディ・ガルシア主演の『ロルカ～暗殺の丘 Death in Granada』、オペラの分野では20世紀アルゼンチンの作曲家オズバルド・ゴリホフの作品『アイナダマール（涙の泉）』があることを付け加えておこう。後者のオペラ作品は、2014年11月に、東京音楽大学教授、広上淳一指揮、栗国淳演出により、またロルカと親しかった女優のヒロイン役マルガリータ・シルグを同大学の横山恵子教授が演じ（この公演では、ソプラノ歌手、飯田みち代氏とダブルキャストの配役）、本邦初公演となった作品でもある。

筆者も、この＜日生劇場企画＞において、劇場からの依頼を受け、ソリストや女声コーラスのスペイン語発音やアンダルシア方言の指導を兼ねた合唱指導を担当した。

②へ続く。

フェデリコ・デル・サグラード・コラソン・
デ・ヘスス・ガルシア・ロルカ
Federico del Sagrado Corazón
de Jesús García Lorca
1898年6月5日-1936年8月19日



■ 声の老化、アンチエイジングについて

喜友名 朝則（耳鼻咽喉科医師, 医学博士）

皆さま、こんにちは！

コロナも感染症分類の2類から5類へと移行し、色々な催し物が開催されるようになりました。やっと人間らしい生活を取り戻せたな、と感じる今日この頃です。

皆さまにおかれましては、いかがお過ごしでしょうか？

しかし、人間が決めた分類とは関係なく、ウイルスはまだ存在しており、病院ではまだコロナが陽性となる発熱患者さんは、ちらほらいらっしゃいます。また、今まで、かなり減ってきていたインフルエンザの患者さんもコロナ患者以上に最近見られるようになってきました。

皆さま、どうぞご自愛ください。

さて、今回の会報では、声の老化、アンチエイジングについて書いてみたいと思います。

人間は年を取ると歩きにくくなったり、重いものが持てなくなったりと、体の機能が衰えてきます。声に関しても同じように、年齢と共に声質に変化が起こります。

特に影響するのが声帯の筋肉がやせてきて、発声の際に声帯がしっかり閉じないことです。

声帯も足の筋肉と同様に、使わないとやせてきます。声帯がしっかり閉じないと、強くしっかりした声が出なくなります。特に高齢の男性は、定年後、声を使って話すことが少なくなり、声帯がやせることに追い打ちをかけます。

それでは声帯をやせないようにするにはどうするか？

それは声を出すしかありません。

足の筋肉がやせて歩きにくくなったらウオ

ーキングして歩けるようになるしかありません。声に関しても、声帯の筋肉を太くするためには声を出すしかありません。

本協会の会員の方は、歌がお好きな方が多いので、心配はいらないと思いますが、やはりコロナ禍で発声を控えておられた方に声が出にくくなっているということがあります。

声を出し続けても、どうしても改善しない場合は、別の原因があるかもしれないので、一度病院を受診してください。

実際、声帯の閉じ具合が良好ではなくて、声の出が良くならない場合は、飲み薬や声のリハビリ、声帯へのコラーゲンやヒアルロン酸の注入、または手術を行うこともあります。

声帯筋の老化以外に声が出にくくなる加齢の変化としては、呼吸機能の低下（肺活量の低下）、声帯粘膜の変化、喉頭線分泌の低下、共鳴腔の変化があげられます。

声は肺から吐く息で発声されますので、呼吸機能の低下（肺活量の低下）は、声の持続や声の大きさ、高さに影響を与えます。

肺活量が低下しないように適度な運動をしましょう。

また、声帯の粘膜は柔らかく張りのある状態が望まれますが、加齢とともに細胞が老化するとヒアルロン酸や弾性繊維が減少し不良コラーゲンが蓄積するため、声帯の粘膜は固く委縮します。

女性ではさらに性ホルモンの影響で粘膜が浮腫状になり声質に変化を及ぼします。また、声帯が在る喉頭という部分には分泌腺がありますが、これが加齢とともに減少し、声帯が乾燥しやすくなるため声が出にくくなります。

乾燥は声に悪い影響を与えます。なるべく水を多く飲むことや吸入器を購入して頻回に吸入することが勧められます。

さらに、声は、声帯から喉頭原音が出た後に、のどや口、鼻などで響いて（共鳴して）口から出てきます。のどや口の中の筋肉も機能が衰えてきますので、その影響で響きにくい声になることもあります。

こちら声を出して鍛えることが大事です。

病院で行える治療としては、音声障害に何らかの病名がつくと、言語聴覚士による音声訓練を行ったり、筋力を上げるような漢方薬を処方したりすることができます。また、非常にひどい場合は声帯に薬剤の注射や手術をする方法もあります。最近では老化に対して有効と思われるサプリメント（抗酸化作用のあるアスタキサンチンなど）が声のアンチエイジングにも効果があるという研究も出ています。体力低下を改善することで声質も改善する効果も認められる漢方薬（補中益気湯）も臨床的に効果を感じています。

声のアンチエイジング対策をまとめます。

まず適度に声を出しておしゃべりすること、音読することなどを習慣とし、さらにカラオケやコーラスなどで歌って声をしっかり出し続けることが大事です。

声を出し続けることは嚥下（飲み込む）機能にも良い影響を与えます。

加齢とともに嚥下機能も落ちてきますので、発声は、誤嚥性肺炎（ごえんせいはいえん）の予防だけでなく、喉に痰が絡むようになるなどの軽い嚥下機能低下にも良い影響を与えます。

どんどん歌っていきましょう。

■ 声楽に導いた歌うピアノ

豊田 喜代美（声楽家、博士/知識科学）

私はピアノを弾くのが好きで、小学校卒業時に記した、将来なりたいものは「ピアニスト」でした。5歳でピアノを習い始めてから、モーツァルト、J.S. バッハ、ベートーヴェンなど、各作品のレッスンを受けており充実していました。ピアノの発表会には祖母や家族が来てくれた嬉しい思い出があります。

しかし中学生時にバレーボールクラブに入り、私の父親がバレーボール選手・監督を歴任している専門家であったこともあり、その指導を受けて面白くなりました。その時に、腹筋と背筋の身体トレーニングの有効性と「今から続けておくと良い。」と父から教えられ、その時からドイツに留学するまで毎日就寝前に腹筋・背筋のトレーニングをしていました。バレーボールの試合と早朝練習に明け暮れ、よく突き指をしてレッスンを休みがちになり、ほぼ3年間、ピアノのレッスンを止めていました。ピアノの技術面のトレーニングは遅れてしまいましたが、この時期に運動に集中できたことは基礎体力作りになった可能性があると思っています。

桐朋学園女子高等学校普通科（別に音楽科がある）は幼稚園からそのまま上がってきた学生がほとんどで、私は高等学校から入試を受けて入学し、仲良し6人グループの内、私を除いた5人が音楽大学志望者でしたので、何となく私も音大を受験することにし、高校2年生からピアノのレッスンを受けることを再開し、5才から10才まで指導を受けた聴音ソルフェージュを再開し、楽典、コーリューブゲンやイタリア歌曲、いわゆる音大受験勉強を高校3年5月から開始し、桐朋学園芸術短期大学音楽科に入学して勉強が本格化しました。桐朋学園大学のピアノ科2学年に編入希望しており、当時指導を受けていた2人のピアノの先生が、それぞれ、井口基成先生（桐朋学園大学レッスン室でベートーヴェン作曲ソナタ）と、江戸弘子先生

（ご自宅でラヴェル作曲ソナチネ）のレッスンに連れて行ってくださり、井口先生、江戸先生から同じ評価の「音楽的。特に音質が美しい。」と言われて自信を持ち、一日8時間の練習も苦にならず、編入学に必要な受験曲も準備万端でした。それが声楽家に憧れるようになったきっかけは、やはりピアノの素晴らしさ～歌うピアノとの出会いでした。

本協会会報の「声楽家への軌跡」で記しましたが、芸術短大の当時のカリキュラムは声楽とピアノを同等に学習することに定められており、そこで、声楽の本格的な指導を受け、自分の情感を歌声と言葉で表現するという世界があることに驚きました。ほとんどの声楽作品には詩があります。詩へのアプローチは、それまでにない精神世界を感じ、それを歌声に表す「声楽」の勉強に興味が掻き立てられました。

声楽の先生、萩谷納先生は桐朋芸術短大と桐朋音大両校の教授でした。萩谷納先生のピアノ伴奏は、ピアノが歌っているという形容がぴったりでした。今でも覚えている一番最初のレッスン曲はイタリア歌曲の *Piacere d'amore* でした。私は歌うピアノに誘われたり、自分の情感がピアノを誘ったりして一緒に歌っていく演奏の醍醐味に魅せられていきました。それが自分にとってかけがいのない素晴らしい創造の世界に導くものだ確信した時、瞬間的に、萩谷先生に「私は声楽家になりたいと思います。」と、自分勝手に声楽科への編入を決めてしまい、ピアノの先生には申し訳ないことになってしまったと思っています。その時のピアノ先生に、大学卒業時に読売新人演奏会に大学の代表として出演することのご報告をした時には、「声楽科に入って良かったですね」と仰ってくださいました。

ピアノ伴奏を自ら弾きながらピアノと歌うことは、私にとっては、良い演奏に向かうために必要なことになっています。

声楽家だけでなく、勿論、器楽奏者にとってもピアノはなくてはならないパートナーであ

ると思います。今でも、ピアノについて少しでも知りたいと、思い続けております。

現在、私達がピアノと呼んで親しんでいるのは、19世紀以降に制作されたもので、17、18世紀にバルトロメオ・クリストフォリが製作した強弱機能の有るチェンバロである *Clavicembalo col piano e forte* がピアノと呼ばれる最初のもので、現代においてピアノの正式呼称はフォルテピアノですが、「古楽器」という分野がはっきりしてきた20世紀以降、19世紀以降のピアノをモダンピアノと呼び、18世紀以前から19世紀前半以前のフォルテピアノと区別するようになりました。

また作曲家のジョン・ケージ (1912-1992) が自作品の演奏に際し、必要にせまられ1940年に発案したプリペアドピアノは、主に現代曲演奏に用いられています。

大音量と劇的な表現力で協奏曲などをオーケストラと共演するモダンピアノと古楽器のフォルテピアノとは、その味わいは異なっていることは容易に解ります。例えば、シューベルトティアデー (シューベルトを囲んで彼の作品や新作歌曲発表などを行うサロンコンサート) のような、特に歌曲演奏会を住居の部屋など小空間で催す場合には、フォルテピアノは歌声と共に、深遠で親しみのある演奏を実現するのではないかと、思います。シューベルトを囲んで主に歌曲を演奏していた集まりは、その精神が尊ばれ、現在、オーストリアのシュヴァルツェンベルクで定期開催され、ウィーン国立歌劇場で主役を歌った歌手を、同時期に開催されるシューベルトティアデーでの歌曲リサイタルや室内楽などの演奏でも聴くことが多いです。

<https://m-festival.biz/introduce/schubertiade>



ショパンはプレイエルとエラールを愛用していたことは知られており、エラールはフランス人で1777年に初めてピアノを製作しまし

た。当時、ハイドン、ベートーヴェン、リスト、メンデルスゾーン、ヴェルディ、ワーグナー、フォーレ、ラヴェルなども使用していました。

私がモダンになる前のプレイエルの伴奏でシューマンの歌曲を演奏した時には、まるで庭の樹木と歌っているような、身近であたたかな音色に触発されて歌いました。忘れられない感覚でした。ピアニストはご自分で、何回も調律していました。

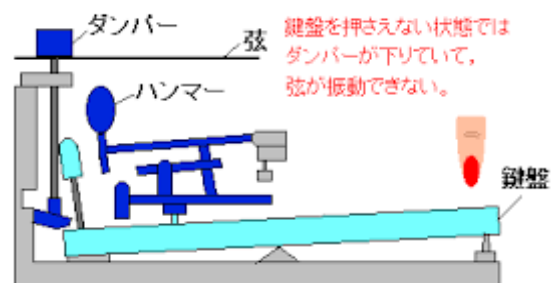
ショパンが生きていたら、エラールとプレイエルの音色をどう感じていて、何が好きだったのかを聞いてみたいです。

次にピアノ (モダンピアノ) のメカニズムについて確認したいと思います。

ピアノのメカニズム

ピアノは、鍵盤を押すとテコの原理でハンマーが跳ね上がり、弦をたたいて音が出るというメカニズム (図1) を共鳴箱に収めたものです。

(図1) 大阪教育大学



それゆえ、猫が鍵盤の上を歩いても、ホロヴィッツが弾いても音そのものは同じであると、しばしば言われます。

しかし、その一方で、たとえば東京のオーケストラの定期演奏会などで、同じホールの同じピアノで、同じ作曲家の作品 (時に同じ曲) を演奏し、しかも同じ席で聴いているにもかかわらず、ピアニストが異なると、かなり違った音に聞こえることも私たちは経験しています。

そこで、本論では、ピアノの音の違いがどのようにして起こるのかという問題を考えてみたいと思います。

ピアノの音の違い

最初に、論考の前提としてピアノの音は「つくられる」ものだということを確認したいと思います。先ず演奏会の前に必ず行われる整調、調律、整音でどのようなことがなされるのかを整理します。

・整調

整調とは、鍵盤とハンマーのアクションを調整することです。つまりピアニストの好みや演奏曲目に合わせて、タッチを軽くしたり、重くしたり、あるいは、ハンマーと弦の距離を調整したり、鍵盤がどの位降りたらダンパーが上がり始めるかのタイミングを調整することです。

この作業により、ハンマーが弦を打つ速度 v が調整されることから、鍵盤に同じ質量 m がかかっても（同じ力で鍵盤を押しても）

$E = 1/2mv^2$ から、弦を打つハンマーのエネルギーが調整されることにより、少なくとも音量は変化することになります。

それゆえ、同じピアノでも異なる整調を行えば音は違ってきます。

・調律

弦の振動数の比が 2 : 1 になれば 1 オクターブ (8 度) の音程差が生じ、3 : 4 になれば 5 度、4 : 3 になれば 4 度、4 : 5 になれば長 3 度となります。調律は弦の張力を加減して、振動数を調整することです。

ところで、このような音程差の組み合わせで 8 度の中に 1 2 の音を割りふると、和音が美しく響くものと混濁するものがあります。ピアノの様に弦の張力や長さを自由に変えられない楽器では、どこかにつじつまを合わせる必要があります。声楽や管弦楽器ではこの点は演奏の際に容易に改善できます。

そこで、オクターブの中の 1 2 の音の音程差を、原理上 2 の 1 2 乗根で均等に割り振ったのが、今日ピアノの調律として一般的な平均律です。しかし、この調律法はあくまでつじつま合

わせですので、オクターブ以外の和音はどこか味気ないものになります。

この方針も演奏者が決定するものですから、同じ作品を同じ楽器で演奏しても平均律で通す場合と、微妙な色付けを行うのでは、極端なほどの聴感上の差異を感じます。そして、この選択肢が、演奏者の作品解釈の重要な要素にもなります。

・整音

整音の最も重要なポイントは、ハンマーの硬さを調節することです。

ハンマーはフェルトでできていますので、フェルトを膨らませたり圧縮させたり、表面を多少毛羽立たせたり、すっきり削ったりすることによって、音は劇的に変化します。

そのことは、太鼓の ばち を硬いものにするか、柔らかいものにするかで、同じ力でたたいても音がずいぶん違うことから、容易に理解できます。

以上の作業は、プロフェッショナルな演奏家とピアノ技術者の間で演奏会の前に入念な検討を経て行われるものであり、同じピアノでも演奏者が変われば音が違ってくるのは当然であり、また、同じピアノ、同じ演奏家でも、演奏する作品の作曲者の時代やドイツ、フランスなど国籍の違いで音を変えるのは当然のことと言えます。

さらに、ピアノの場合はペダルの存在を無視することができません。ペダルには音の持続時間を変化させる操作（ラウドペダル、右のペダル）と、通常 3 本セットである弦のうち、2 本のみを打弦して音色・音量の変化をもたらす操作（ソフトペダル、左のペダル）、特定の音だけを持続させる操作（ソステヌートペダル、真ん中のペダル）の 3 種類があります。

作曲家が、現在のピアノの機構が確立されて以降の時代の場合は、さほど問題はありませんが、現在のピアノの機構以前の時代の場合は、ペダルの使用は当時の楽器の響きを念頭に置いて演奏家が判断する必要があります。

そのために、同じピアノで同じ作品を演奏しても、ピアニストによって、響きの変化が生じる場合があります。

ここまで、主にピアノの機構面に即して音色の変化がどのように起こるのかについて述べましたが、ここで、ピアニストの身体をとおしてどのような音色変化ができるのかについて述べてみたいと思います。

ピアニストの身体と音色の変化

ピアニストは鍵盤の押さえ方について、しばしば指を立てたり寝かせたり、微妙に異なる方法で鍵盤を弾きます。しかし音色は指先や手の具合だけでなく、それらに繋がっている骨格や筋肉、身体全体で創られるものです。そのことを知識だけでなく、体感によっても深く理解し自覚することが重要であると思います。このメカニズムの知識と体感による自覚の重要性は、身体そのものが楽器である声楽にとって顕著といえると思います。

ウィーンに在るベーゼンドルファーのピアノ工房にはホールがあり、発表会や演奏会で使用されています。筆者が個室を借りて声楽練習を終えた帰り際に見たのは、そのホールで行われているピアニストの公開レッスンでした。ウィーン音大などの受験前の若い人たちが受講していました。

そのピアニストは、ピアノの構造を説明し、受講生がその知識を持っているか否かを確認していました。また、ピアノを弾く際の人間の骨格がどうなっているかについて、図を用いて全身について説明し、椅子と臀部の接着面について、自らをモデルに解説しました。受講生4名に対してそれぞれに、「自分の中心がどこにあるか」を聞いていましたが、「どこにあるのが正しい」とは言わず、受講生に自分の中心を意識するように伝えて1フレーズを弾かせ、中心の位置を受講生に確認しながら、「そう。その音色だ！」と指導していました。この「自分の中心」は身体だけでなく精神も含んでいる、と私

なりに解釈しました。受講生はその音色を出した姿勢を記憶したと思います。一人の受講生は息を止めないようアドバイスされていました。

受講生は4名で、3人は1分ほどで止められ、作品を演奏するにあたり読むべき本を3冊教えられ、それを読んだら、また来なさい、とのことでした。あと1人は最後まで弾くことができ、アフェクト（情念）という言葉が多く用いての表現について詳細に指導を受けていました。

その曲の文化的背景の理解が演奏に必要なものは、同じ人間として生きていることを知って自分のものとしてその曲の本質を魂で感じ取るためと私は自分なりに解釈しました。

「真にアフェクトを感じると自分の中心が燃えて、弾くエネルギーとなる、自分の中心が燃えていることを感知できなければならない、そのために本を読むのだ」とのことでした。

哲学の講演のような内容のある公開レッスンでした。

この経験で、1999年からの大学院大学（JAIST）入学で開始した「芸術の人への作用」のキーワードが、個別の心身における感受性であることが確信でき、沖縄県立芸術大学赴任後、新授業「身体知基礎演習」を立ち上げるきっかけとなりました。

授業「身体知基礎演習」は音楽学部全専攻から履修生が来ており、毎年の授業評価において、履修生全員が自らの専門のパフォーマンスが向上したという評価を得ました。この全員であることが、とても嬉しく、誇りに思います。

その履修生のお一人だった根神夢野さん（本協会幹事）は、NSCA-CPT（注1）の資格を近年取得しました。※会報第6号に詳細掲載。

徐々に若い人たちにも身体が楽器である歌唱についての意識が深まっているならば、大変嬉しく思います。（注1）NSCA(National Strength and Conditioning Association/全米ストレングス&コンディショニング協会

声楽とピアノで創る音楽芸術の極みとされるドイツ歌曲…。2004年に浜離宮朝日ホールにおいて「シューベルト女声リートの世界～詩・ゲーテ～」を開催しました。シューベルトゆかりの地で、最初の墓地の在ったウィーンのペッツラインドルフに住んで、ピアニストのヴォルフガング・フックスベルガーの許で準備をしてリサイタルに臨みました。

特に最近、ドイツ歌曲リサイタルを演奏会案内で見ることが少なくなったように思います。

10月28日（土）ドイツ歌曲珠玉の作品第3回「仲本博貴バリトンリサイタル（那覇市パレット市民劇場）」でシューベルトの歌曲が歌われるのは素晴らしいと、喜んでおります。

このリサイタルチラシを見てお気づきの方も多と思いますが、声楽家・仲本博貴のリサイタルでありながら、ピアニスト・内海博子の名前表記が同列で大きさがほぼ同じです。これは、ドイツ、オーストリアなどのドイツ歌曲演奏会では普通のことです。それは、ドイツ歌曲演奏会においては歌手とピアニストは同等の責任を負っているソリストであるということを示しており、今回も仲本氏の判断だと思えます。

ドイツ、オーストリアなどの音大には歌曲伴奏科があり、沖縄県立芸大卒の内海博子さんはミュンヘン音大も修了し、指導側としても勤めています。また、本協会のドイツ歌曲マスタークラスでは、世界的歌曲ピアニストの演奏家でウィーン音大教授との出会いにより、ヨーロッパで更なる活躍が約束されています。「仲本博貴ドイツ歌曲バリトンリサイタル」は、稀少・貴重で豊かな音楽の時間となることでしょう。

私も先のドイツ歌曲リサイタルから11年経過した分の感情が満ちてきているのを感じるのでドイツ歌曲を歌いたいと思っています。

ドイツ歌曲演奏の準備は、私にとっては、自分が全身全霊で作品に向かっているかを問い続けながら、身体を楽器として鍛える機会になると思います。

歌唱における人への作用を、音楽療法の観点と身体運動科学の視点を持って、特に1999年から研究実践しています。身体全体と精神全体とで詩と歌を歌うという行為は、ある意味、自分の心も他人の心も良好にすると考えております。音楽家とだけでなく、機会あるごとに、子供たち、人々と、歌を通して交流していきたいと願っております。

筆者の疑問を、即、解決くださったピアニストの渡辺健二氏に感謝申し上げます。

写真は小倉貴久子氏所蔵の古楽器プレイエル 製作/1848年パリです。氏の了承を得てご紹介いたします。鮮明な画像は小倉貴久子氏のホームページにございますので、ご参照ください。



小倉貴久子 Kikuko Ogura 略歴

東京藝術大学を経て同大学大学院ピアノ科修了。阿姆斯特ダム音楽院を特別栄誉賞“Cum Laude”を得て首席卒業。第3回日本モーツァルト音楽コンクール、ピアノ部門第1位。1993年ブルージュ国際古楽コンクール、アンサンブル部門第1位。1995年同コンクール、フォルテピアノ部門で第1位と聴衆賞を受賞。日本を代表するフォルテピアノ奏者。

本年9月8日演奏会開催（豊洲シビックセンター）